

[成果情報名] 電気ショッカーボートでのオオクチバス駆除による生息個体数の推移

[要 約] 2017年から2019年に畑谷大沼において電気ショッカーボートでオオクチバスを駆除した結果、3年目に推定生息個体数が大きく減少した

[部 署] 山形県内水面水産試験場・資源調査部

[連絡先] TEL 0238-38-3214

[成果区分] 政

[キーワード] オオクチバス、駆除、生息個体数

---

#### [背景・ねらい]

本県において、ブラックバスは昭和50年代から見られるようになり、それ以降分布域が拡大している。外来魚による内水面漁業資源への被害拡大が危惧されており、内水面漁業協同組合による駆除、密放流や再放流禁止の啓発活動などが実施されている。1995年にブラックバスおよびブルーギルの移植放流が禁止（山形県内水面漁業調整規則）、さらに2017年には内水面漁協が管理する漁場において採捕したブラックバス等のリリースが禁止された（山形県内水面漁場管理委員会指示）。

今回は、2017年から2019年に畑谷大沼で実施した電気ショッカーボートによる外来魚駆除結果より、生息個体数を推定した。

#### [成果の内容・特徴]

- 1 畑谷大沼で2017～2019年に民間コンサルタント会社が保有する電気ショッカーボートが山形県内水面漁業協同組合連合会に無償で貸し出され、外来魚駆除を共同で行った。
- 2 駆除は各回とも1周約1時間の採捕であったため、プログラムcaptureを用いて除去法により畑谷大沼におけるオオクチバス生息個体数を推定した結果、2017年は456尾、2018年は536尾、2019年は147尾であった（表1）。2017年と2018年は個体数は横ばいであったが、2019年は大きく減少した。なお、2019年は、調査日が異なるものの、水温がほぼ同じ、かつ、この時期に新規加入は無いものとし、5回採捕したこととして生息個体数を推定した。
- 3 3年間に駆除したオオクチバスの全長組成を示す図1。各年とも二歳魚とみられる群が最も多く採捕され、次いで当歳魚とみられる群が多かった。二歳魚の駆除は翌年以降の繁殖に参加する個体を減少させ、また、当歳魚の駆除は次年度以降の親魚候補の減少につながると考えられた。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 閉鎖性水域における駆除の継続は確実に個体を減らすことが可能であることから、継続した駆除作業を実施する必要がある。

[具体的なデータ]

表 1 畑谷大沼における駆除による採捕結果と推定生息尾数

調査年	調査月日	採捕尾数				水温 °C	推定尾数 尾	95%信頼区間
		1回目	2回目	3回目	4回目			
2017	8月24日	145	95	72	-	25	456	421-502
2018	10月13日	125	130	77	51	18	536	495-592
2019	10月20日	27	24	26	-	15.6	147	129-183
	10月26日	25	9	-	-	15.2		

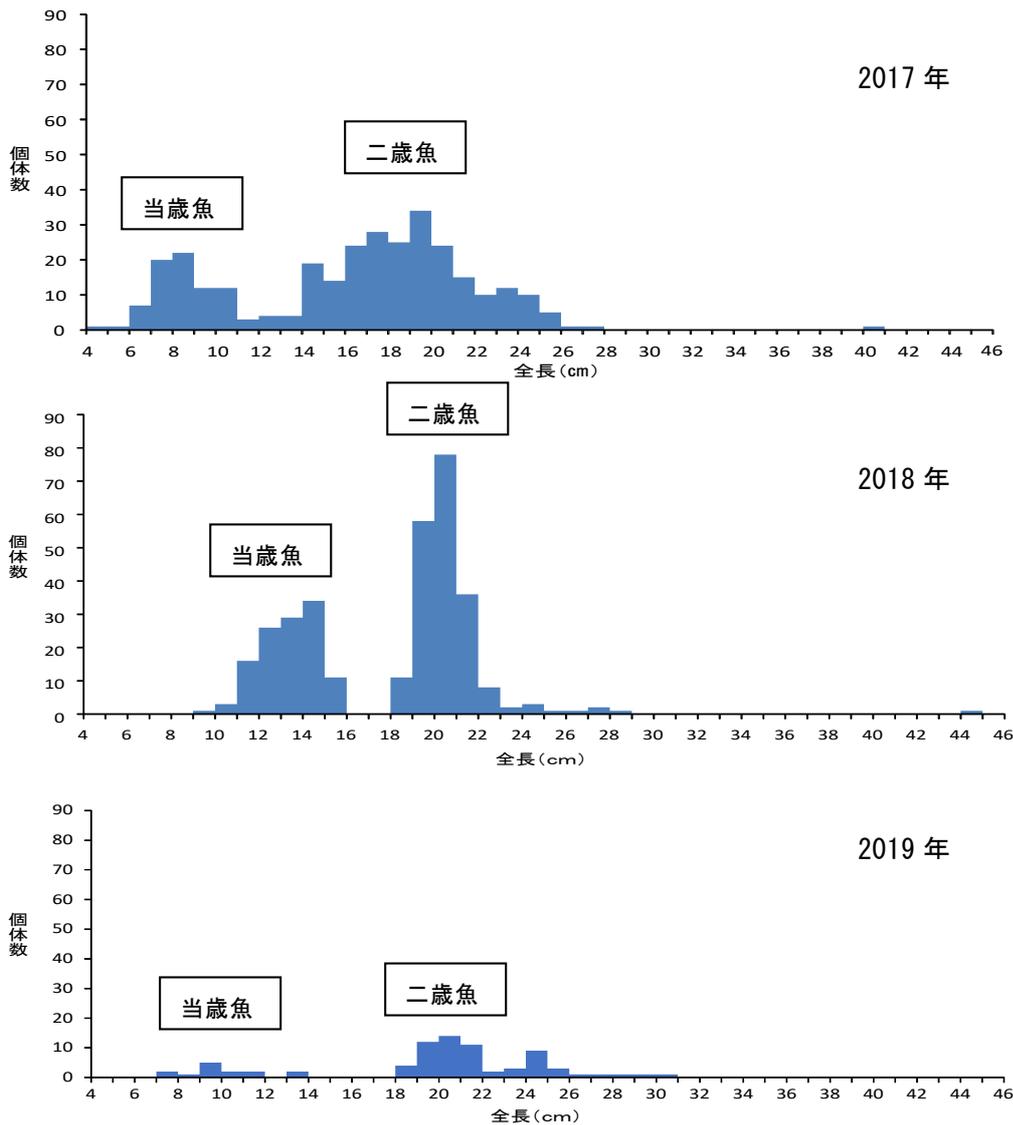


図 1 駆除したオオクチバスの全長組成

[その他]

研究課題名：カワウ・外来魚等対策事業

予算区分：県単

研究期間：令和元年度（平成 29 年度～令和元年度）

研究担当者：河内正行、山形県内水面漁業協同組合連合会

発表論文等：なし